「被爆体験談や平和への思い」応募用紙

記入日 平成26年（2014年）[redacted]月[redacted]日

ふりがな しらさわ えいじゅ 氏　名 白沢英寿 ※　氏名の公開の可否（ 可 ・ 否 ）	生年月日・年齢 [redacted]
現住所・連絡先 〒[redacted]	
電話 [redacted]	FAX [redacted]

（聞き取り代筆した方の連絡先）

ふりがな しらさわ 氏　名 白沢いづみ（英寿母） ※　氏名の公開の可否（ 可 ・ 否 ）	電話 [redacted] FAX [redacted]

※　上記に記載された個人情報の取り扱いについては、広島市個人情報保護条例に基づき、平和宣言の作成、被爆の実相を伝える資料としての活用及びこれに付随する事務連絡のみに使用し、御本人の同意なく第三者に提供しません。

（被爆当時の状況）

当時の年齢	28 歳	性 別	男 ・ 女
当時の職業・学年等（できれば具体的な勤務先・学校名等も御記入下さい。） 夫英寿は三月結婚再那の船泊兵団司令部に入隊し 剣道7段の腕を買って隊員の指導に当っており大河の隊に 移動した直後でした 終戦地広島に帰り剣道教師を死ぬ迄 やり通しました 昭和7年になります 防空壕に入る際右眼の光から平にかけて黒人 焼かれました			

※　被爆当時の状況については、平和宣言に盛り込む際や被爆の実相を伝える資料として活用する際等に、公開します。

※　この応募用紙に、被爆体験談（様式不問）を添付してください。

※　提出された書類は返却いたしません。

広島原子爆弾被爆体験記

助野信正

太平洋戦争も既に末期を迎えていました。日本全国各都市が空襲に見舞われていたさ中、軍都広島は未だその惨禍には会っていませんでした。それが何と、一瞬にして10数万人の人々が亡くなったのです。この時この空爆が、人類最初の原子爆弾とは、誰も知らなかったのです。

当時学生だった私（昭和3年生れ）は、旧制中学4年生でした。が、その一年間戦争による学徒動員で神戸の工場に動員され、5年生は、カットされて卒業となりました。高校進学するのも工場動員のまま8月迄延期され、ようやく8月開校となりました。私は広島工専へ。8月1日入学式があり、授業が始まり一週間が過ぎました。8月6日当日は朝から警戒警報が発令されていましたが、学友と定刻8時に登校、校舎2階の教室中央に着席。出席点呼を受けたその直後の8時15分、一瞬の強烈な閃光が目を焼き左窓側2列の机上がボッと燃え上がった、一瞬の感覚で傷痍爆弾攻撃を受けたと思い、とっさに立ち上がり机列の後方に逃げようとしましたが、次の瞬間、強烈な爆風と轟音と共に、足を掬われ、机の間に投げ倒されました。完全な校舎の倒壊、木造の破れ千切れるバリバリという音と物凄い壁土の粉塵で呼吸も苦しく、数十分間は生気を失い、真っ暗な中身動きもできなかった。ようやく明るさが射込むと同時に体中がキリキリと傷みはじめました。足が柱に挟まれていることに気付き、手のとどく壊れた机の脚木等でこじ開け、何とか体が動ける様になりました。しかし体のあちこちから血がにじみ、痛みが走りだしても手当てのくすりなどありません。ガラスの破片、破れた天井板、へし

曲った机等体中の無数の傷を、着ていた布を引きさいて、とにかく傷口を押えました。それより身を守る為、逃げ出す事が先決、火が燃え出しては万事窮す、何とか天井裏に遣出しました。そこここで友人の呻き声のする隙間をこじ開け、引き剥し、助け合って、ようやく地上に降り立ちました。

校庭のまわりの木蔭には大勢の傷付いた負傷者、或は動けない人々が横倒っており、誰もしばらく動く事が出来ずにいました。私も傷付いた友人と共に、くずれる様に休息しました。

ようやく周囲の様子を確かめるべく振返ると何棟もある校舎は、爆風でマッチ箱の様に押しつぶされていましたが、幸い火災を免かれて安堵しました。市街地の方を見ると、北西方面が一面に焼煙・炎が棚びき、頭上には眞夏の空に巨大な白煙がもくもくと立上がっており、その周囲を軍用機が1機舞っていましたが、私達は未だこの爆撃が1発の爆弾とは知るよしもありませんでしたが、私の郷里の空爆の経験から、何か変った空爆の様に感じました。振り返ると、后方の工場からも焼煙が上り始めました。

入学后、僅か1週間、顔も名前も定かならず、側に相寄っていた友人2～3人と、「ここにいては危険」と相談、広島市を脱出することを考えました。

正午頃、学校を出て宇品に向う途中、通りの家々は全て押しつぶされ、家の前には多くの人が傷付き、顔は焼きただれ、座り込んでいました。着ている着物は、ボロボロで、白黒のモンペ姿は黒い部分が焼けこげてレース状に引き裂かれた状態でうづくまっていました。なかには「水をくれ」と手を合せる人、お互に覆いかぶせる人等見るも無惨な光景で

した。御幸橋を渡ろうとして、川の中を見ると、とても云い表わせない悲惨な光景が眼をうばいました。川の面に浮び流される無数の遺体、川上の方へどこまでも続く黒い人影、そして又川岸につかまり滑り落ちる人々、いや水を求めて飛び込んでいる夥しい人々の姿、助けようもなく、唯々見送るだけでした。更に進むと、軍隊のトラックが、道端に折重なった死者を、頭と足を2人で持ち、荷台に放り上げ、うず高く積重ねて運んで行った姿は、この世の姿とはとても思えませんでした。そんな悲惨な車の側をすり抜け、更に宇品港を目指して歩き乍ら、友人と相談を重ねたが、ここで一時の避難を見切り、市外脱出を決意しました。その為、寮にある身回り品を取り出すべく、方角を変え、比治山の東側を北上しました。が、途中の病院や学校、鉄筋の建物も総てガラス窓は吹飛び、人蔭も全くありませんでした。ようやく辿りついた広島駅近くの寮も倒壊しており、狭い防空壕に入って夕方を待ちました。昼間の移動は敵機の襲われる危険を避け、夜の出発としました。友人も各々の家に向い、1人になると、見知らぬ土地で一段と覚悟を決めました。

いよいよ夕方になり、脱出に出発、国鉄山陽線づたいに、東へ東へと歩きました。後方は、広島市内の火災が明るく燃え上っていましたが、あたりは暗闇で眞直ぐには歩けませんでした。と云うのも、道路の片側には、負傷した多ぐの人が手を合わせて水を乞い、時には死人に躓き、更には、その上に転んだその感触は今も忘れられません。だが、途中で救助隊員の方から乾パンを分けてもらい、本当に有難たかったです。朝から何も食べず、歩き回って、やうやく1袋の乾パンを手に出来、口に出来た嬉しさに涙が出ました。よう

やく翌日夜明けに、2駅目の海田市駅に着きましたが、駅構内には、満員の列車が待機しており、車内には入られませんでした。止むを得ず車輌の継目に両足をかけ、出発を待ちました。もうここまで来れば、忍耐でした。数時間后、ようやく発車しましたが、途中何度か空襲警報に会い、その度に停車、時には、襲撃を避ける為トンネル内に避難、汽車の排煙で呼吸もままならない事もありました。が、昼夜を徹して、翌8日早朝ようやく三宮駅に到着しました。ところが三宮周辺は、別の空襲であちこちが燃えていました。実家の芦屋も駄目かなと観念し乍ら、私鉄に乗換えやっと帰宅できました。早朝裏戸を叩いて入ったところ、広島の空襲のことを未だ知らぬ父母から、「なぜ帰って来たのか」「空襲が怖かったのか」と叱られました。だがその日の朝刊新聞"輻射熱新型爆弾"の報を見て、手を取合って無事を喜び合いました。

そしてその後8月15日の終戦を迎えましたが、充分療養する為、父の田舎で2ケ月間療養生活を送ることにしました。途中、神戸市内の病院で被爆の健診を受けた結果、放射能による白血球異常と診断されました。同時に外傷数十ヶ所の傷治療を受けました。

11月になって、ようやく学校より開校の知らせを受けましたが、学校は仮校舎で、場所も広島から遠く離れた呉市広町の海軍工廠宿舎建物でした。新聞写眞では、被爆した広島市街、千田町の本校舎は見る影も悲しい情景でした。でも喜び勇んで、その地に赴むき、集った学友の中には、顔面のケロイド症状のひどい仲間もおり、亡くなった学校関係者は、約500人中、100人と聞かされました。その頃広島被爆地は70年間、草木も生えないと報じられていました。

思い起すと、その年の3月、受験の為初めて訪れた広島で世話になった宿は、相生橋の袂にあった「虎家」旅館でした。戦時中の旅は、皆米持参でしたが、[redacted]には実に暖かく世話をしていただきました。川向うの家からは“乙女挺身隊”の曲が悲しく流れていました。そしてここが何と爆心直下であったとは。恐らくあの原爆で、一瞬にして、亡くなられたのでしょう。あの旅館の中で、或は庭先で、どんなに熱かったでしょう。

ああ・・・・、安らかにお眠り下さい。

被爆者からの訴え

仙台市　炭谷良夫

私は大正１４年８月（１９２５年）広島市榎町で生まれ育った者で、現在は仙台を永住の地と定め老後生活を送っている。

毎年夏が近付く頃になると決まって想い出されるのが一発の原子爆弾によって壊滅し焦土と化した広島市内の惨状が鮮明に蘇って来る。

私は東京獣医専門学校（現日大農獣医学部）に通う学徒で東京で下宿生活を送っていた。当時文科系の学生は１８才で兵役が課されていたが、理科系の学生は在学期間が半年短縮されていたものの学業を終える迄入営は延期されていた。

昭和２０年に入ると戦況は一段と厳しくなり、内地の空襲も連日連夜で激しさを増していた。６月沖縄が米軍の手に堕ち本土決戦が叫ばれる様になり、入営が延期中の学生も凡て米軍の本土への上陸決戦に備え出動するとの噂が巷に専ら流れる様になった。私は郷里の家族に別れを告げるべく下宿が同宿であった友人Ａ（医学生）と共に７月末一緒に帰省した。

私の家族は強制疎開で市内から約３０キロ離れた佐伯郡玖島村に

疎開していたため、当時の交通事情から東京往復には市内に一泊しなければならず、友人Ａは両親が市内で居住しておられたので必ず友人宅を利用させて貰っていた。

私は８月５日朝家族に別れを告げ広島市内に向かった。同夜は市内の友人達が催してくれた送別会にＡと共に出席し、夜半遅くＡの母親が住む居宅に戻り泊めて貰った。（Ａの父親は市内中心部で産婦人科医院を開業し、母親は約２キロ離れた別宅で生活していた。）

翌朝便所の中で被爆したが、幸い爆心地から約３キロ離れていたと、当時の木造家屋内では最も堅牢と言われていた便所内であったため、直射光線熱線を受けることもなく五体無傷で外に出ることが出来た。

然し友人と母親は血みどろで座敷内に横たわっていたが、意識は正常で頻りに産科医院に泊っていた父親の安否を気遣いその確認を私に依頼した。私は半袖の白Ｙシャツと学生服の黒のサージズボンで目的地に向かい飛び出して行った。市内電車の軌道に沿って市内中心部に向かったが、左右の家屋は凡て倒壊し惨状は目を覆うばかりであった。特に御幸橋の東詰には中心部から風上に向かって逃げて来た夥しい人々の行列に出会った。凡ての人々の衣類はボロボロ

に破れその衣服の下には焼けた皮膚が垂れ下がり苦痛にあえぐ姿は目を覆うばかりであったが、その隊列の中に中学時代の級友を見付け思わず近寄って「頑張れ」と叫んだ事が今でも忘れられない。安否確認に向かっていた友人の父親の医院は其処から約１．５キロ先であり更に急ぐ事にし進んだが、電車が横転していたり、家屋の損壊物が散乱していたりして思う様に進めなかったが、何とか広島市役所付近迄は辿り着く事が出来た。既に近辺には火災が発生しており進路が妨がれていた。残す処約３００ｍで目的地迄行く事が出来たが、残念ながら引き返えさざるを得なかった。その夜は友人宅の前の畠の中で友人母子と共に過ごした。

翌日、午後になって市内の火災が収まったという情報を得て急ぎ友人母子と共に昨日の道を進み目的地に向かったが、昨日と違い一言で表現するならば黒一色になっていたと言っても過言ではない。真黒に焼けた死体が無数に点在し、中には未だかすかに息をしている人も居たが、なす術もなくそれらの死体を跨ぎながら目的地に急いだ。

私には市内に下宿して専門学校に通っていた妹が居て、当日は勤労動員先でなく通学日である事が判っていたので、友人母子と別れ

妹の安否確認の行動をする事にした。（別途の資料は８月５日から９日迄の行動を図示したものである。）８月７日の日没寸前に神社の境内の松の大木の根元に数名の同様な負傷者の中に交じって横たわっている妹を奇跡的に発見する事が出来たが、呼べど叫べど応えず意識が無かった。私は約１キロ離れた処に知人宅（東練兵場の東詰脇）があり妹を運ぶ為の車を借りるため急いだ。幸い、その知人宅は損壊していたが倒壊はしておらず、籐製の乳母車を提供してくれたので神社境内に急いで戻り、人手を借りて妹を乗せ又東練兵場に向かった。広い練兵場も負傷者や避難者で満ち溢れていたが、草叢を見付け妹を車から降ろしその横で８月７日の一夜を過ごした。

翌朝呉市から海軍の医療班が駆け付けて来てくれたので応急処置をして貰ったが、妹の意識は戻っていなかった。再び妹を乳母車に乗せて東練兵場から広島の西の郊外地古田町に在る親戚に向った。途中の道路は倒壊家屋等で道幅を狭められ限られた道しか通る事が出来ず、それ等の道は近郷近在から身内の安否確認に急ぐ大勢の人達で行列ができ前に進む事すら困難であった。途中、偶然に中学の水泳部の先輩に出遭い妹の乳母車を一緒に押して貰い、午後になってやっとの思いで親戚に辿り着く事が出来た。途中、４本の市内を

流れる川に架かっている橋が到る処で通行不能となっていて大きく迂回さざるを得なかったが、いずれの橋も両詰に前夜の火災に耐えられず川に飛び込み水死した人々の死体が積み上げられていた。特に印象に残っているのは爆心の相生橋の東詰に米兵が２人、鉄製の電柱に針金で縛り付けられ顔、頭からの出血は凝固していたが火傷のない死体に憎さの余り通る人々が 蹴ったり踏んだりしていた事が現在でも忘れられない。親戚は破損はしていたが泊めて貰うことは出来た。

翌朝（８月９日）ラジオニュースで長崎にも同型の爆弾が投下された事が報じられたが、新型爆弾とのみで原子爆弾と公表されたのは８月１５日終戦日の午前の事であった。然し私は妹を運ぶ途中で目にした市街地の焼土化の模様や、重度の黒焦げ死体、橋の両端に積み上げられた水死体を見て来たので事態の容易ならざる事を実感していた。

８月１０日、妹の意識も次第に戻って来たので家族のもとに帰るべく材木運搬のトラックの荷台に妹を乗せて帰った。その後日を追って原爆の実態が報道される様になり、放射能の脅威を知り改めて愕然とした。が、後の祭りで観念せざるを得なかった。

９月中旬迄家族の疎開先で過ごしたが、学生生活に復帰すべく東京に戻った。その頃から下痢症状が回復せず下肢大腿部に紫色の斑点が出て来たため、担任教授に相談した処、休学して故郷で療養する様奨められたので広島に戻り、直ちに妹と共に別府温泉で年末迄療養した。

翌年復学し昭和２３年学業を終え大手乳業に入社、社会人となったが内部被爆の症状が出て来ない事を祈るばかりであった。

社内外では被爆した事は努めて語らない様にした。昭和５６年停年を迎える迄数度の転勤転居を重ねたが、仕事上でも私生活面でも特に異常は認められなかったが、５８年仙台に移住し翌５９年に３３年間連れ添った妻を失った。丁度その頃から体調（特に胸部）に異常を感じる様になり病院通いが始まった。

既に私は今迄に狭心症で心臓バイパス手術を２回、前立腺癌で放射線治療、胃癌の切除手術を２回受け、更に現在は喉頭癌の経過観察を行っている。私の家系には癌を患った者は皆無で独り私のみがこの様な憂き目に遭っているが、これも被爆の為と観念せざるを得ない。この様な経過を辿り乍も今年８月には８９才の誕生日を迎える。３年前の東日本大震災時にも無事であったし、人生で二度の危

機を無事に越し得た強運を天に感謝するとともに永年に亘り私を支えてくれた家族や周囲の方々に心から感謝している次第です。

今日現在私達被爆者は全国で約２０万名の方々が健在で、内７０％の方が広島、長崎の両県に居住しておられる。当宮城県にも２００名弱の方々が在住しておられるが、原爆の実態を多くの人達に語り伝える人は年々減少している。広島に住む実弟から郷里に戻り「語りべ」をやらないかと誘われたが、永住を決めた仙台でその任を果たすべく断った。現在、全国の被爆者は一丸となって核兵器の廃絶と原発の廃止を訴え、政府を始め各界に働きかけているが未だその成果は挙げるに至っていない。我が国の原子力発電は安全安心を旗印に昭和４０年代初期にスタートしたが、今や米国に次ぎ世界第２位の多基を持つに至っている。この数は全土の面積比、人口比から見ても世界のトップクラスにあると思う。東日本大震災後３年が経過したが復興は半ばに過ぎず、福島原発の近在地のみならず広域の人々に不安と不幸を齎している。政府は震災直後は原発の比重を落とし転換可能な自然エネルギーへの転換を計ると言っていたが、最近になって原発を「重要なベースロード電源」と位置付け再稼働を進める方針を明記したエネルギー基本計画を決定した。然も国内

のみに留まらず原発の輸出を積極的に奨励している。国民の生命を守る事が政府の使命と広言しているが、原発を沢山保有していては生命は守れない。国民あっての経済であり、経済あっての国民ではない。所詮私は地球上では核と人類は共存できない事を広言して憚らない。何故なら自然の巻き起こす力は時として人間の英知をもってしても抗し切れない事が証明されたからである。

我が国の原発はその大半が海に面しており、特に太平洋に立地する原発は今後起こりうるであろう南海トラフの大地震に対し安全が確保出来 のであろうか？原発依存から転換可能な自然エネルギーへの転換を推進すべきである。私は一刻も早く地球上から核が無くなり世界中の人々が安心して生活出来る環境が訪れる事を希求して止まない。

私達の時代は終わった。次世代の人達に被爆者からの期待を願い上げる次第です。

以上

平成２６年５月

被爆者として次世代（若い人）に伝えたいこと、望むこと

今年は原爆被爆から六十九年目になります。

被爆者の平均年齢は八十歳を越え高齢化しています。私も八十八歳になり、被爆した時二キロメートルの地点で目に見えない放射能を多量に吸ったのか、又、強烈な爆風で約三十メートルも吹き飛ばされ地面に叩きつけられ打撲傷の影響によるものか、甲状腺機能低下、白内障、肝機能障害、心房細道という心臓病、頸椎、腰椎、神経障害等で歩行困難となり健康状態はボロボロになって弱っています。弟も同じように広島駅に勤めており、私を心配して探してくれ逢うことができました。見てもどこも怪我はしていない元気な姿で、一緒に広島駅の復旧作業に従事しました。その後弟は何年か経って国鉄を退職して他に転職しました。やはり多量の放射能を吸っていたのか、肝臓がんになり、そのがんが他の臓器すべてに転移して十七年前に死亡しているのであります。

しかし私は、あの愚かな戦争の苦しみを恨み、惨酷な原爆を憎みながら今尚、「生きぬいて」いますが、あの愚かな戦争で非人道的な核兵器によって広島と長崎の街も文化もすべて焼きつくされ、大人も子供の区別なく無差別、大量に焼き殺し、生き残った多くの被害者は今尚苦しみ続けているのであります。

こうした残虐な原爆（核兵器）を使った米国と日本政府は安保条約の軍事同盟を結び、沖縄をはじめ日本国内に数えきれない軍事基地を設け米軍の駐留を許しているのであります。そして米国が差し出した「核の傘」に入り、核の抑止力に守られていることを当然のこととして、その矛盾にも平気で政府は米国に追随しているのであります。

さらに過去の誤った侵略戦争の歴史認識に反省もなく、A級戦犯を祀る靖国神社に参拝し或いは領土問題を蒸し返して、隣国との対立や断絶状態になっているのであります。

三年前に発生しました東日本の大震災で核は絶対安全だと言っていました福島第一原発が災害にあって、大量の放射能をまき散らしすべてに汚染いたし、「安全神話」が大きく崩れ去ったのであります。いまだに放射能汚染が続き住民は避難生活から戻ることが出来ず、不安な状態にあります。それにもかかわらず政府は使用済み核燃料の再処理計画も確定しないまま、原発の再稼働にのめり込んでいるのです。

さらに安倍内閣は原発を外国に売る協定の締結をすすめています。それこそ被爆国日本としてNPT（核拡散防止条約）に背反する懸念が高まってきていると思います。その行動は直ちに中止すべきであります。

現在、原発の稼働によって使用済み核燃料から生み出されたプルトニウムは増え続け、長崎型原爆の五千五百発分にもなるといわれ、これが軍事転用となれば日本の核武装の動向と相俟って危険な状況にあります。又、世界の核保有国が持っている核兵器は二万発もあり、地球も人類も何度でも破壊し殺戮できる力を持っているといわれております。その核兵器も米国をはじめ核保有5大国からインド、パキスタン、北朝鮮などへと拡がっているのです。先般開かれたNPT再検討会議に向けた第3回準備委員会は、核保有5大国と非核保有国の対立によって来年の再検討会議への勧告についても意見一致が見られず断念する事態になり核兵器廃絶までの道のりは険しくきびしいものとなっていますが、人類にとって核兵器廃絶は緊急な課題であることを認識しこれからも被爆地は核廃絶実現のためねばり強く世界の世論に発信しなくてはなりません。

いま、自民党政権は「戦争放棄と戦力交戦権を否認」する平和主義に立脚した日本国憲法第九条の解釈、改憲で集団的自衛権を容認しようとしています。この憲法第九条の規定があればこそ、これまで六十九年間戦争を一度も起こすこともなく平和を守り続けているのであります。

又、世界中どこをみてもこうした平和憲法を持った国はありません。このことは日本の誇りだと思っています。

もし戦争となれば現代は「核戦争」です。その戦争に行くのは私達ではなく、あなた達「若い人」が行くことになるのです。よく考えてみて下さい。そのためにも核兵器廃絶は緊急重要と思っているのです。

今こそ被爆国日本が先頭に立って世界の核兵器廃絶に力を入れなくてはなりません。そうして米国に追随することを止めて、「核の傘」から脱却し非核三原則の法制化を実現、脱原発で核のない日本の国づくりで安全で平和な住みよい社会にしようではありませんか

私は心から叫びます「集団的自衛権を容認する憲法の解釈改憲には絶対に反対し、戦争反対、原発の再稼働反対、原発の外国売却協定反対、日本の核武装反対、自衛隊を軍隊にすることに反対」することが重なことであります。

最後に核兵器を廃絶しこれ以上核の被害者を作らないことこそヒロシマ・フクシマの尊い平和の心として念じ次世代の若い人に伝え、望むことを私の思いといたします。

瀬戸高行

私の被爆体験

私は二十歳の時、当時の国鉄（現在はJR）の広島駅操車掛として構内で客車の入換作業中直接原爆で頭部、顔面、両腕から手の先まで焼かれ、そして強烈な爆風で約三十メートルも吹き飛ばされ、地面にたたきつけられ一時失神状態になり、しばらくして周辺が見えるようになり明るくなってきて正気に戻ったのです。その途端、何がどうなったのかわかりませんでしたが母の顔が浮かんで「お母さん」と叫んでいたのであります。前方を見ると大勢の通勤客の人の群が駅のホームの方から線路を飛び越えて当時の東練兵場の方に向かって走っているのです。私も立ち上がり、このままここに居ては死ぬのではないかと死の恐怖に突き上げられその人の群の中に入って東練兵場に走り込んだのです。あの広かった東練兵場にはすでに近辺に住んでいる人達など足の踏み場もない程に倒れている人などで溢れていました。そのうち真夏の太陽が昇り暑さも増し汗も出る。太陽が完全に昇るといやが上にも汗は吹き出てくるのでした。そうした時、倒れている人の中から「水をくれ、助けてくれ」と悲痛な叫び声が聞こえてきました。しかし練兵場には「水の出る所は無く、治療する所」も無くどうしてあげることもできませんで悲痛な叫び声だけが何時までも耳に残っているのでした。

広島駅でもホームの屋根が倒壊して落下し、その下敷きとなられた百人位の客が圧死されています。さらには国鉄職員にも多くの死傷者がでるなど、語りつくされない原爆被害の惨状でありました。

私達も駅のことが気になり帰ろうとしているところへ私と同じ広島駅に勤めている弟が私を探しに尋ねて来て「何とひどい火傷」をしているなあと驚き、今から広島駅の復旧作業が始まるから一緒に駅に行こうと言うので、皆と一緒に駅に帰って上司の運転主任さんを見つけ走り寄ると上司も私達を見て「ひどい怪我をしているんだな」と言われ、しかし今からすぐに本線上の客車を引き出して開通させなくてはならないんだ、大変であろうが元気を出して手伝ってくれと言われ本線の車両の引き出し作業や落ちかかっている屋根の撤去作業や避難列車の編成作業等それぞれ手分けをされ、指示をされ、私は操車掛であり入換機関車を誘導して各線の車両の引き出し作業を担当することになり、その作業に取り組み十一時頃西方面から迫って来た、火災までには屋根の撤去作業も含めて全部完了させたのであります。避難列車の編成作業も順調にすすみ十二時すぎ気傷者約二百名を乗せて裏線から「避難列車一号」として山陽本線上り方面に出発させることが出来ました。私達も

皆火傷で大怪我をしており、破れ服で、朝から何も食べておらず空腹に耐えながら頑張りました。それからは山陽本線上り方面と芸備線から救援列車が到着出来るようになり、その列車は折り返えして避難列車となって出発したのであります。

そうした状況の中で上司の運転主任さんも我が身の怪我をかえりみず、疲れ切っている私達の姿を見ながら「良くやってくれて有難う今日はもうこれでよい」下り方面は不通で列車は運転できないので歩いて帰るしかないが、山陽線上り方面と芸備線上り方面には夕方五時頃避難列車が運転する予定である。それに乗って帰れる者は帰って治療してくれ快癒したら又、出勤してくれそれまで休んでもよいと指示を受け私も弟と連れだってその避難列車に乗って午後七時頃家に辿り着きました。私を見た母は「もう死んだのかと思った」と言って二人共よく生きて帰ってくれた」と涙を流して抱きしめてくれたのであります。弟は全く怪我をしていないが、私の大怪我の姿を見て、近所の病院に看護婦として勤めている姉に連絡しその病院で治療をしてもらい入院をさせたのであります。火傷によく効く薬と治療が良かって一カ月目に頭、顔面、両腕に巻いた繃帯を解かれましたが、頭髪は抜けた部分と焼け縮れた部分でまだら模様で丸坊主、顔は黒ずみ、かさぶたがあちらこちらに付いており、両腕にも同じようにかさぶたが付着してみるも醜い傷跡で人に見られる恥ずかしさがこみ上げてきました。これでは駅に復帰することは出来ないと情けない気持ちになったのですが、膿ぐきからの出血が止まらず、高熱も続き、白血球の減少等で身体がだるくもうしばらく治療をした方がよかろうと診断され、それから半月ぐらい経過するうち、症状が徐々に回復し顔や両腕の黒さやかさぶたも取れてきて、頭髪だけは生え揃っていませんでしたが、職場や同僚のことも気になって何時までも休んでおれないと思い恥ずかしい姿であることに耐えながら意を決して九月中旬広島駅に復帰したのであります。復帰して、見る広島市の町は焼け野原になっていること、無差別に十四万人もの人間が焼き殺されているという残酷なこと、国鉄の同僚も多く亡くなっており、傷つきいまだに復帰できない人のことなど残酷なことばかりでした。その中で私と同じ操車掛の坪井紀征さんは私と同じように爆風に吹き飛ばされ、自分が誘導していた入換機関車の前に落下し胴腹を真断され即死されたことは、愚かな戦争と残酷な原爆に強い怒りを覚え「心のキズ」となって今尚忘れることはできません。

更に被爆の直後「原爆は遺伝するから被爆者との結婚は出来ないという風評が流布され私はこうしたいわれなき風評は断固無視することにして、将来助役に昇職し駅長になる夢を持っていました。駅に復職後も一心不乱に勤務と勉強に励み、遂に一九五四年（昭和二

十九年）に念願の助役試験に合格し二十九歳の若さで広島駅予備助役に任命され、駅長になれるところまで到達していました。しかしあの愚かな戦争で非人道的残酷な原爆の被害から生き残った一人の人間として被爆体験した者がこのまま平凡に過ごしてよいものかという疑問が私の心を突き上げ、助役職のままで反戦、反核、平和と原爆被害者救援の為に一身を捧げようと決意したのです。その時上司から駅長をめざした夢を変えるなと強く説得されましたがそれを断わり反戦、反核平和、被爆者援護の道にのめり込んだのであります。

その信念を突き進めるためには先づその組織化が重要であると考え、一九六六年（昭和四十一年）日本の労働組合として一番最初となった「国労被爆者対策協議会」を結成したのであります。次には一九七四年（昭和四十九年）被爆二世の会を結成。その前年の一九七三年（昭和四十八年八月）には原爆で死没された国鉄職員の慰霊碑を国鉄労働者の手で広島と長崎の両市に建立いたしました。特に広島市の建立地については、原爆にゆかりの地として八月六日第三七七貨物列車が京橋川にかかっている鉄橋上で原爆の直撃に逢って寃下の河川敷に落下した所でもあり、原爆に焼かれて大怪我をした被爆者が水を求め飛び込んで死なれた所でもありました。

次には一九八四年（昭和五十九年）には広島市原爆被害者の会を私の発議によって結成したのです。

さらに一方においては一九八四年から二〇〇〇年までの約十六年間広島県被団協副理事長として、核の平和利用もあり得ないと主張されていた反核哲学者の森滝市郎理事長の下で運動に奔走したのであり、この偉大な森滝市郎理事長の下で奔走したことは私の人生に於いてすばらしい誇りであり、宝であると思っているのであります。

その後、私も原爆被害の関係か甲状腺機能低下、肝機能障害、心房細道の心臓病、神経症等により体調を崩し二〇〇〇年（平成十二年）現在の立派な坪井直被団協理事長を招聘いたし私は副理事長を退任したのであります。

以上が国鉄職員の時の被爆から国鉄中心の被爆体験のあらましであります。

瀬戸高行

「被爆体験談や平和への思い」応募原稿　　兵庫県芦屋市・副島圀義（胎内被爆）

胎内被爆の私も「語り継がねば…」と思っています。

１９４５年８月１９日。原爆投下から２週間目に、私は南千田町の半ば倒壊した家（爆心地から南に２．５km・修道学園の北向かい）で生まれました。母の手記には、出産の時などの苦労話も登場します。被爆後、家族みんなが「原因不明の病気に替わるがわるかかり、医者からも見離されるありさま」（母の手記）だっただけに、健康には過保護といえる位、気遣ってくれた母でした。

私自身は、被爆者だということでつらい思いをしたことがありません。母の胎内で守られたこと、父が早期復員でき、広島転勤前の京都の家に無事戻れたこと（３年後、兵庫県芦屋市に転居）、安定した生活基盤があり栄養・休養が保てたこと、「被爆者手帳」が交付されるようになった時にすぐ受け取り年２回の健康診断や窓口負担なしでいつでも必要な医療を受けられてきたこと…。とてもラッキーだったのです。

（逆に言えば、投下直後の死を免れた方々に、十分な治療、栄養、休養が保障されていたら、どんなに多くの方が助かったことか、と思います。真逆のこと＝原爆被害の実相を徹底的に隠蔽したこと、原水禁運動が大きく展開するまで、生存被爆者に対する援護措置をまったくとらなかったこと等々＝を、やり続けてきたアメリカや日本政府の罪は重大です。）

◇　◇　◇　◇

母が兵庫の地で母が被爆者運動、原水禁運動に携わるようになったのは、私の小学生の時ですから、その姿は母の「日常」でした。父も、当然のように母の活動を理解し、協力していました。そこには「被爆当時の家族を守ってくださった広島の皆さんへの感謝の気持ちと、（父の）実家のある小倉を爆撃するはずの第二弾が長崎に落とされた、いわば身代わりとなった長崎の皆さんへの申し訳ない気持ち」（母の手記）がありました。核軍拡・被爆者虐待への怒りがあったことはもちろんですが…。

◇　◇　◇　◇

「被爆の実体験」は語れないけれど、「被爆一世」のなかで最年少、〝健康に恵まれ、生活の心配もない自分にできること〟は、やらないと申し訳ない…。それが、わたしの避けることのできない役割だろうと思っています。

被爆写真・絵画集を読んだり、平和祈念資料館を見学したりしますが、その度に、いかに被爆の実相を知らなかったか、思い知らされます。広島・長崎で５０万以上の方が被爆し、６９年たった今「手帳」を持つ方が「２０万人をきった」ことが問題になるくらいですから、「知らないこと」のほうが圧倒的であることも当然でしょう。それでも、知ったことの一部を伝えることはできます。全国各地で原爆症認定を求める裁判が続けられていますが、大阪の裁判をできるだけ傍聴し、「傍聴記」を地元のミニコミ紙に掲載してもらっているのも、そのひとつです。

裁判のなかでは、国がどれほど被爆の実相から目を背けようとしているか、毎回毎回、見せ付けられます。福島原発事故が収束どころか、拡大する恐れすらあるというのに、国のトップが世界に原発を売り込みにまわる…信じがたいような事態があります。被爆の実相を、どんなにわずかのことしか知らなくても、一人でも多くの人に知ってもらう。できることを自分のペースで、続けようと思っている一被爆者です。

「被爆体験談や手紙への思いに」

「被爆者として次の世代（若い人）に伝えたいこと」と題して

高形　辰人

復員して降り立った広島駅から見えた光景は、「これが広島なのか」と目を疑いました。焦土品の似島が見渡せる程の一面焼野原でした。この光景は、私の脳裏に強く焼きついています。

今の人たちにそれを言ったとしてもわからないと思います。

広島駅から歩いて生家までの道中は、まるで地獄絵図のようでした。黒こげになった多くの死体、爆風により、せり上がった相生橋、寺町の辺りは、馬が大きな火ぶくれがいました。本川は、死体がたくさん流れていく、河岸からまだ息のある人が流されていくが助けようと手を伸ばしても手をつかんだ時、皮がずるりとむけて、川の中に沈んで流れていきました。あの時代、どうしても助けられなかったのだろうかと無念さと悔しさは、六十九年たった今でも変わりません。今でも時々、夢に見るのです。

一発の原子爆弾で一瞬のうちに数十万人の尊い命が奪われました。とても恐ろしいことだと思います。ひとりの命の重さは、いつの時代も普遍で尊いものです。

このことを後世に伝えていくことが私たち被爆者がより広島に住む私たちの責務だと思うのです。

最近では、原爆の投下されたのも正確に答えることのできない若い人が多いと聞いたことがあります。それはとても恐ろしいことです。とても悲しいことだと思います。

私も八十六歳になり、あと何年生きることはできません。戦争の悲惨さに人間はいつ気づかないのでしょうか。

核兵器が地球上に存在する限り、核の恐怖に脅かされ続けます。その事を身をもって体験した私たち被爆者が、あの悍しい出来事を伝

えていくことが、平和に向かっていく唯一の道だと思うのです。

先日、被爆者でありながら一度と足を運ぶことのなかった平和祈念資料館に、息子と孫の三人で訪れました。その日は、四月の上旬、校の遠足の日でした。その光景は、「平和」そのものでした。平和資料館は、修学旅行生や外国人の方が多く訪れていました。

資料館を見ると、またその当時の光景を思い出すのです。

戦争をして得るものなんて、あるはずはありません。訪れて改めて原爆の悲惨さや非人道的な核兵器の使用の愚かさ憤りを感じずにはいられませんでした。

最近では、少しずつではありますが、被爆当時の話しを息子や孫たちに話すようになりました。私たち被爆者が語ることが、次の世代の平和につながると信じているからです。

恩讐ではなれた方々の御霊に平和への祈りを捧げます。

合掌